

I 糖業の概況

1 海外の動向

(1) 砂糖類概況

F．オリヒトが平成 19 年 7 月に発表した世界の砂糖需給によると、06/07 年度の全世界の生産量は 1 億 6730 万トンの予想で、05/06 年の 1 億 5260 万トンより 1470 万トン（10%）増加。EU が生産量を削減し、南アメリカ諸国の生産量もほとんど増加していない一方、アジアの生産量、特にインドの生産量の増加が著しいためである。

一方消費量については、前年度より 2.9% 上回る 1 億 5040 万トンが見込まれている。これは最近のトレンドの年間 2% 程度の増加に比べ、大きな増加幅である。その要因としては、砂糖が低価格で潤沢な供給が行われている一方、代替甘味料の原料となるトウモロコシの高価格で推移しているためことが考えられる。

消費量は増加しているが、今年度の生産量、特にインドをはじめとするアジア諸国の生産量の増加が著しいことから、期末在庫は 7640 万トンとなり、在庫-需要比率（stock-to-use ratio）は昨年度の 44.2% から 50.8% と近年に例を見ないほど増加する見込みである。

(2) 砂糖の国際価格の推移

2006 年 4 月～2007 年 3 月のニューヨーク現物相場の月平均価格をみると、一貫して下落傾向で推移した。2006 年 4 月には同年 2 月に粗糖相場が記録的な高値を更新した流れに引き続き、18 セントを超える水準であったが、国際相場の高騰を受けて主要生産国が大幅な増産に転じたこと、投機筋が売りに転じたことから下落を続け 8 月には 13 セント台、年が明けて 1 月には 11 セント台まで下落し、その後も 11 セントの水準で推移した。

2 国内の動向

(1) 砂糖類概況

平成 17 年産の甘味資源作物の国内生産は、てん菜については、作付面積はやや減少したが、全体的に生育に適した天候に恵まれたことから単収が高く、総収量は昨年に次ぐ 420 万 1 千トンとなり、産糖量も史上最高であった昨年に次ぐ 70 万 8 千トンとなった。

一方、さとうきびは、収穫面積が昨年より減少したことに加え、台風や干ばつなどの被害を受けたが、昨年を上回る 121 万 3 千トン、産糖量 13 万 8 千トンとなった。

砂糖の消費は、消費者の低甘味嗜好や砂糖に対する誤解、加糖調製品の輸入増加などを背景として減少が続いているが、砂糖需要の維持・増大に向けたシンポジウムの開催や各種広報媒体を活用した普及啓発活動のための取り組みによって、平成 14 砂糖年度においては、229 万 6 千トンと、12 年振りに前年を 0.8% 上回ったものの、平成 15 砂糖年度は対前年 2.6% 減の 223 万 7 千トン、平成 16 砂糖年度は対前年 0.4% 減の 222 万 9 千トン、平成 17 砂糖年度は対前年 1.9% 減の 218 万 7 千トン（見込み）と減少傾向が続いている。

加糖調製品の輸入状況（18 年 4 月～18 年 3 月）は、「コーヒー調製品」が対前年 34.7%、「調製した豆」が同 3.3% 減少したものの、「ココア調製品」が同 4.1%、「その他の調製品（ソルビトール調製品を含まない）」同 16.2%、「粉乳調製品」同 2.0% 増加し、「ソルビトール調製品」は横ばい（同 0.0%）であった。この結果、これら

の品目全体では、対前年 2.4%増の 44 万 1 千トンとなった。

異性化糖の移出動向は、第 1・四半期の移出数量（標準異性化糖換算）は、5 月、6 月が前年を下回り、前年同期を 4.7%下回った。第 2・四半期は、9 月が前年を下回ったものの、7 月・8 月が前年を上回り、前年同期を 0.5%上回った。第 3・四半期は、9 月が前年を下回ったが、10 月、11 月が前年を上回り、前年同期と比較して増減は見られなかった。第 4・四半期は、1 月・2 月が前年を上回り、前年同期を 1.5%上回った。この結果、18 年度の移出数量は、前年より 1.0%減の 79 万トンとなった。

(2) 砂糖類の国内価格の推移

砂糖の日経相場（東京）上白大袋の価格は、前年度の原油高による燃料コストや資材等の上昇を背景とする国際粗糖価格高騰を反映して、18 年 3 月 30 日に 156～157 円/kg となって以来、高水準で推移していたが、国際粗糖相場の下落により原料糖の調達コストが下がったことから、11 月 10 日に 2 円下落し 154～155 円/kg となった。

異性化糖の日経相場大口需要家向け（東京・タンクローリーもの）価格は、原料とうもろこしの国際価格の上昇や海上運賃の高騰によるコスト上昇を背景とする異性化糖企業各社のユーザーへの値上げ要請の浸透により上昇傾向にあり、7 月 21 日付けの日経相場でキログラム当たり 5 円値上がりし、96～100 円/kg（果糖分 55%もの、中心値）となり、その後は原料とうもろこし価格の高騰も相まって、1 月 26 日にはキログラム当たり 5～3 円値上がりし、101～103 円/kg（果糖分 55%もの、中心値）、3 月 23 日に 5～7 円値上がりし、同相場は 106～110 円/kg（果糖分 55%もの、中心値）となった。

3 国内産糖の生産動向

(1) てん菜糖

ア てん菜の生産

平成 18 年産てん菜の作付面積は前年産比 137ha 減の 67,364ha、栽培農家戸数は前年産比 270 戸減の 9,850 戸、一戸当たりの作付面積は前年産比 0.17ha 増の 6.84ha となった。

北海道平均の ha 当たりの収量は 58.2 トン（前年産 62.2 トン）、総収量も 3,923 千トン（前年産 4,201 千トン）と平年並みの収穫となった。また、根中糖分は 16.4%（前年産 17.1%）と平年よりも低い糖分となった。

イ てん菜の生育概況

てん菜の植付け開始は、天候の影響により、平年より 8 日遅く、最盛期も平年より 6 日遅かった。また、各地で作業が長引いた。

生育初期においては、5 月の気温が高めで日照時間も多く定植後の苗の活着は比較的良好であったが、6 月に入り低温・寡照となり、生育は停滞気味となった。

その後、7 月には良好な天候となり、回復に向かった。

生育中期以降は、8 月には暑い日が続いたが、適度な降雨があり、更に秋も高温に経過したことにより、根部の肥大は特に順調に推移した。しかし、根中糖分については、高い気温及び褐斑病の影響により低糖となった。

病害虫については、褐斑病が多発し、低糖の要因となった。また、収量にも、少なからぬ影響があったものと思われる。その他の病害虫については、根腐病はやや少なく、そう根病は平年並で、葉腐病、黒根病の発生も一部では見られた。ヨトウ

ガの発生は少なかった。

ウ てん菜糖の生産

18年産の産糖量は、産糖歩留が16.21%（前年産16.86%）とほぼ前年並で、ha当たりの収量が前年に次ぐ高収量となったため635,702トン（前年産708,488トン）となった。このうち、てん菜原料糖は205,796トン（前年産256,389トン）で総産糖量に対する割合は32.4%（前年産36.2%）となった。

(2) 甘しゅ糖～鹿児島県産～

ア さとうきびの生産

18年産のさとうきびの収穫面積は、前年実績より306ha(3.5%)増加して9,055haとなった。

作型別割合では、夏植え25.3%（前年産23.7%）、春植え19.7%（同20.2%）、株出55.0%（同56.1%）となっている。

10a当たりの収量は、前年実績より167kg(2.7%)増加して6,266kgとなった。地域別では、沖永良部地域が918kg(18.0%)増加して6,014kg、奄美地域が515kg(10.3%)増加し5,504kgとなった。そのため、さとうきびの生産量は前年より33,780トン(6.3%)増加して、567,374トンの実績となった。

また、さとうきびの栽培農家戸数は、前年より348戸(3.3%)減少して10,060戸となった。

イ さとうきびの生育概況

○生育初期（3月～5月）

3～4月の低温と、4～5月の日照不足の影響で、平年より生育はやや遅れた。

○生育旺盛期（6月～9月）

7月は気温・日照とも良好であり、8月上旬は干ばつ被害を心配したが、徳之島で大きな被害を受けたものの、全体的には大きな被害とはならず、8月下旬から9月中旬にかけて各地区でまとまった降雨があり、育成は、平年並みまで回復した。

○生育後期（10月～収穫期）

10月以降は、平年より暖かく、降雨量・日照時間とも平年並みとなったことから、育成状況も平年並みとなった。

ウ 甘しゅ糖の生産

分みつ糖の歩留は前年実績より0.80ポイント上回り12.61%、含みつ糖の歩留は前年実績より0.31ポイント下回り11.98%であった。

産糖量は、分みつ糖が前年実績より8,530トン(13.7%)増加して70,583トン、含みつ糖は、前年実績より104トン(10.2%)減少して919トンとなった。

(3) 甘しゅ糖～沖縄県産～

ア さとうきびの生産

18年産のさとうきびの収穫面積は、前年実績より190ha(1.5%)増加して12,675haとなった。地域別では、沖縄地域が245ha(3.7%)増加、八重山地域が19ha(1.1%)増加したが、宮古地域では75ha(1.8%)減少した。

作型別割合では、夏植え50.1%（前年産48.5%）、春植え12.2%（同11.9%）、株出37.7%（同39.6%）となっている。

10a当たりの収量は、前年実績より406kg(7.5%)増加して5,848kgとなった。地域別では、沖縄地域が547kg(11.6%)増加し5,276kg、宮古地域が371kg(5.6%)

増加し 6,963kg、八重山地域も 79kg (1.4%) 増加し 5,545kg となった。そのため、さとうきびの生産量は前年より 61,865 トン (9.1%) 増加して、741,284 トンの実績となった。

また、さとうきびの栽培農家戸数は、前年より 102 戸 (0.6%) 増加して 17,748 戸となった。

イ さとうきびの生育概況

○生育初期 (3月～5月)

各地域の月平均気温は、3月は平年並みで、4月は概ね平年より高く、5月は平年よりかなり高めで推移した。降水量はほぼ全域で概ね平年並みだった。

○生育旺盛期 (6月～9月)

各地域の月平均気温は、平年並みか、やや高めで推移した。降水量は、8月は平年より少なかったが、その他の月は平年より多かった。大東地域では少雨傾向が続き降水量が平年の 32% しかなかったことから、生育旺盛期の水不足により、生育が阻害された。

また、期間中は、6個の台風が接近し、第13号については、倒伏、根離れ、葉の損傷など大きな被害が生じた。特に八重山地域の被害が大きかった。

○生育後期 (10月～収穫期)

各地域の平均気温は、全体的に平年よりも高い状態が続いた。1月から2月にかけては、平年との差が 1.0℃～1.8℃あり暖冬で、寒気による影響が少なかった。

降水量は、10月は各地域とも高気圧に覆われ晴れの日が続き、平年より少なかったが、11月以降は、平年よりも多くから平年並みへと推移した。大東地域も11月には大雨があり、干ばつの解消に向かった。

ウ 甘しゃ糖の生産

分みつ糖の歩留は前年実績より 0.22 ポイント上回り 12.35%、含みつ糖の歩留は前年実績より 0.79 ポイント上回り 14.68%であった。

産糖量は、分みつ糖が前年実績より 8,975 トン (11.8%) 増加して 84,898 トン、含みつ糖は前年実績より 490 トン (6.6%) 増加して 7,916 トンとなった。